

田辺元と中井正一

——「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」を中心に——

河合 一樹

序

下村寅太郎の没後にその遺稿を整理した竹田篤司は、一九三三年一月の日記の中に次のような記述があることを紹介している。

二九日 夜西田先生の会。田辺先生、高坂、西谷、久保、

高山の諸君。先生先づ、個体と個体とが相限定することと普遍と個体とが相限定することとの結び付きを新しく考へられたりとして話さる。田辺先生の鋭き質問あり。田辺先生に於ては、社会が必しもIch u Duと云ふ形に於てなくとも存し得ること、去日の我も、汝の性格を持つと云ふことは本来の意味に於ける汝でなく、従て本来の意味に於ける社会でない。もし今日のロシアの社会が impersonal な社会であるとす

れば此処に一の反証が存する。新らしき芸術形式としての機械美や共同制作の如きものに於てもこの傾向が存し得る。尤も、これらの価値判断を離れて唯だ自説の Verfeidigen にするのみ。Ich u Duと云ふ論構は Bourgeois 社会より生れたるものと云はねばならぬ——云々。

〔下村寅太郎 日記（竹田篤司『物語「京都学派」』中央公論新社、二〇〇一年所収、八七〜八八頁）〕

竹田の解説によれば、西田幾多郎にはこの頃論文を脱稿すると門下を集め議論する習慣があり、時期及び内容の面から見てその論文は『哲学の根本問題』所収の「私と世界」であるという。引用からは省略したが、この後日記の後半で下村は、西田の説に対して田辺元が手厳しい批判を投げかける様子について、「思想上の二大高

峰の高く聳え立つ偉観に天来の *Symphonie* を聴く感じを懐い」と感想を述べている。往年の京都学派の姿を髣髴とさせる一節であると言つてよいだろう。

しかしながら、本稿が冒頭からこの文章を引用したのは、京都学派の隆盛に思いを馳せたいからではない。注目したいのは「新しき芸術形式としての機械美や共同制作の如きものに於てもこの傾向が存し得る。」という田辺の発言である。名前こそ挙げられていないものの、ここで言及されているのは中井正一であると考えられる。中井は京都大学美学講座で深田康算に師事した人物であり、田辺とも直接面識があつた⁴⁾。一九三〇年には『思想』に既に「機械美の構造」を発表しており、また特に映画に注目しつつ「共同制作」についても積極的に論じていた。

もとより、この短い記述から田辺が中井に対してどのような評価をしていたかということをも具体的に明らかにすることは出来ないが、どちらかといえば肯定的な態度を取っていると見てよいだろう。他方で、中井はこの夜に先立つこと二年、一九三三年四月号の『哲学研究』に書いた田辺の『ヘーゲル哲学と弁証法』の書評において次のように述べている。

著者が示さるる弁証法的人間学において、問題の提出と発展

の契機となりし身体性の問題は、今後それを嗣ぐものによつて道具の付託性の問題、社会的物理的集团的性格、すなわち、機械の問題の転換に対して深い支持と展望を投げ与えている。さらに判断論においても、具体的判断としての繫辞的判断論に路が開かれるにあたつて、投票論あるいは物価論は、この領域より出発する遠き展望となるであろう。さらにいわゆる存在と意識を越えて、内的なるものの外化としての表現の性格を有せるザツへを根底とするところの即物弁証法の立場は、今後の知識階級が依ることを運命づけられし研究領域として、かぎりなき放射路をもつている。

〔「田辺元著『ヘーゲル哲学と弁証法』、中井一・三八〇〕

中井は田辺が論じた「身体性」の問題が「機械の問題の転換に対して深い支持と展望を投げ与えるものである」と述べている。また、一つ一つ検討することは避けるが、その他の話題に上っている事柄も後に中井が「委員会の論理」などにおいて取り上げているものである。従つて、ここで中井は自らの思索の基礎となるものとして田辺の思想を位置づけ、極めて高い評価を与えているといつてよいだろう。田辺が西田との議論の中で中井に言及したのも、あるいはこのような中井の書評を念頭に置いてのことだったかもしれない。

こうした文章を踏まえると、田辺と中井との関係がより具体的にどのようなものであったのかという興味が湧いてくる。しかし、その点は今日までの研究において十分に明らかにされてはいない。もちろん、両者に関係があること自体が無視されている訳ではないが、両者の著作の内容に立ち入って検討したものは存在しないと思われる。

本稿の目的は、そのような事情を踏まえて中井がこの書評の直後に書いた「ノイエ・ザツハリツヒの美学」を出発点として両者の言説を見比べ、その関係を整理することにある。二人の人物を比べる以上、本来であれば両者の思想の全体を俎上に載せるべきところを、限られた著作から考察を始めるのは、偏に筆者の能力と紙幅との限界の為である。とはいえ、「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」は単に書かれた時期が先の書評に近いというだけではなく、内容において田辺の発言を意識した記述が認められるという点からも、本稿の問題意識の上から優先的に考察すべきものである。従って、本稿の考察は結局のところ部分的なものに止まらざるを得ないにしても、一定の意義を有するものになりうると考えられる。

さて、両者に双方を肯定的に捉える発言があることからすれば、比較的容易にその間の思想的繋がりを指摘することが出来るのではないかと予想される。しかしながら、実際に両者の著作を読み比

べるならば、事情はそう単純ではない。「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」においても既に両者の間に埋めがたい相違が生じているように思われる。その点を指摘することから論を起こしていきたい。

一 「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」

序において紹介した中井の書評が一九三二年四月の『哲学研究』に掲載されたものであったのに対して、「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」は同年五月の『美・批評』に掲載されている。従って、この二つはほとんど同時期に執筆されたものである。

この論文で主題となっている「ノイエ・ザツハリツヒカイト」は、二〇年代から三〇年代にかけて起こった芸術運動のことである。ただし、中井の論文はその具体的な運動の動向や作品などについて紹介するようなものではない。むしろ、その哲学的基礎づけを求めて極めて抽象的な議論が展開されている。

とはいえ、いずれにせよ実際の芸術運動を巡る美学的考察がどのようなにして田辺の思索と接点を持つのかという疑問が当然生じるだろう。両者を結び付けるのは「ザツハリツヒカイト」という言葉である。先の書評において中井は、田辺の「即物弁証法の立場」を

高く評価していた。そして、この「即物」はドイツ語で *Sachlichkeit* と表現される。田辺は『ヘーゲル哲学と弁証法』の中で次のように述べている。

弁証法は、現実が自然と精神との矛盾の統一であり、存在と思维とは独立的に相対立して一が他を規定し、他が一方を反映する如きものでなく、両者は不可分離なる現実の両契機として互いに媒介し合ふことに由りて、現実発展の自覚原理となるのであると解せられなければならない。私は之を即物弁証法と呼んだ。即物とは *Sachlichkeit* の訳語である。即物弁証法は *Sachlichkeitsdialektik* 或は *Sachdialektik* とくくてもよいであらう。即物の物は物質の物でなく事物の物を意味する。本来ヘーゲルに於て事物 *Sach* は物 *Ding* が単に多様の属性の直接統一なると異り、内的なるものの外化として所謂表現の性格を有するのである(Hegel, *Encyclopädie* § 147)。故に事物自身の弁証法的運動といふも素朴的に物の運動が語られるのとは異り、その外的偶然的契機と内的理性的契機との統一の内的発展を意味する。即ち同時にそれは概念の運動であるといはれる。

『ヘーゲル哲学と弁証法』田辺三・一五四〜一五五

田辺は、この直前においてヘーゲルの弁証法とマルクスの弁証法とを共に一面的なものとして批判する。そして、弁証法のあるべき姿として、またヘーゲル哲学のあるべき姿として「即物弁証法 *Sachlichkeitsdialektik*」を提示する。

中井は「ノイエ・ザツハリツヒカイト」とこの田辺の「ザツハリツヒカイト」への言及を結び付ける。「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」において、中井が田辺を意識してつつ書いたものと判断される箇所として次のようなものが挙げられる。

cogito ergo sum が、*ens creatum* とくくの *res cogitans* 「造られたるもの」としての「思维するもの」といふ考えよりはなれたる時、*Ding* と *Tatsache* は特殊な構造をもつべきであったのである。前節にのべしごとく、主観と客観が内在的解体をなす時、*Ding* と *Tat* は一つの発展として *Sache* の中に解消されるべきであったのである。ここにおいて *Ding* は単なる超越的知覚対象ではなくしてハイデッガーが指摘するごとく *Beisorge* (配慮) において出あうところのプラグマタであり、プラクセイズにおいて交渉されるべきものである。ヘーゲルにおいてもディングは多様の属性の直接的

統一であるに對してザツへは内なるものが外にあらわるる表現の性格をもつてくる。それがいわゆる意味でもある。

Sach の味、あるいはむしろそのいづきは、ルネッサンスよりバロック、バロックよりさらに止揚されたるルネッサンス、すなわち現代のもたらす思惟様式においてのみ感ぜらるるものである。ここにわれわれが *Neue Sachlichkeit* とよぶもののものは、かかる観点におけるザツへにおいてである。「物」と「行為」の止揚されたる、行為する物、物の行為の意味において理解さるべきである。ハイデッガーの付託總体 (*Verweisungsganzheit*) の概念の中にあらわるる道具 (*Zug*) の考えかたはまさにかかるザツへの意味に向かつてその途を^ら展^らいでいる。

「ノイエ・ザツハリッヒカイトの美学」 中井二・二四〇二五

ここの中井の記述は、田辺の文章と完全に一致している訳ではない。しかしながら、「ザツへは内なるものが外にあらわるる表現の性格をもつてくる」という表現は、先立つ書評における「いわゆる存在と意識を越えて、内的なるものの外化としての表現の性格を有せるザツへを根底とするとこの即物弁証法の立場」と一致しており、また「ディング」と「ザツへ」との区別に関してヘーゲルに

言及する論じ方も田辺と軌を一にしている。中井が田辺を強く意識しつつこの文章を書いていることは疑う余地がないだろう。

では、ここの中井の主張は田辺の思想をそのまま引き受けるものと言いうるだろうか。両者の文章を見比べるならば、論脈においても個々の字句においても多くの相違があり、必ずしも全面的に一致するものではないかと予想される。しかしながら、異なる点を一つ一つ検討して行くことは困難である。ここでは最大の相違として中井がここでハイデガーに極めて肯定的に言及しているということに注目したい。中井は「ザツへ」はハイデガーにおける「道具」と一致するものであると述べている。しかしながら、田辺は『ヘーゲル哲学と弁証法』の先の引用に続く箇所でハイデガーに言及してはいないし、それどころか同時期の田辺の思索において^らはむしろハイデガー批判が重要な課題となっていた。

二 田辺のハイデガー批判と「身体」

田辺が『ヘーゲル哲学と弁証法』を書いた時期においてハイデガー批判を展開していたにもかかわらず、中井が両者を結び付けるような記述をしている点に、田辺と中井との最大の相違を見出した。従つて、続いて田辺のハイデガー批判について一瞥しておく必要が

あるだろう^③。

『ヘーゲル哲学と弁証法』の序文には次のような一文がある。

私にとり、積極的に新しきオルガノンとなつたのは、昨年以來私の個人的なる関心の対象となつた心身関係の問題から展した身体性の弁証法である。「中略」斯くて心身関係の古き問題は私にとり新しき関心事となり、交互作用論と並行論との対立を超えて弁証法に始めて其解決の途を発見するに至つたのである。私にとつては身体性のフェノメンが弁証法の基本的所在であり、これに於て始めて観念と物質との各を超え、而も両者の対立的統一を自覚する真に具体的なる絶対否定態が現れるのである。私は斯かる立場からハイデッガーの存在論を批評し、これに対して新に弁証法的人間学なるものを提唱した（朝永博士記念論文集所載『総合と超越』人間学特輯号所載『人間学の立場』参照）。

『ヘーゲル哲学と弁証法』 田辺三・八一

ここで田辺は、「身体性の弁証法」を考へることによつて「始めて観念と物質との各を超へ」ることが出来たと述べており、またそれは「ハイデッガーの存在論」を乗り越えるものであるとしている。

そして、田辺における「身体性」の強調はハイデッガーの「道具」に対する考えを批判するものでもある。西田と田辺との対決の開始を告げるものとして有名な「西田先生の教を仰ぐ」には次のような文章がある。

私も亦ハイデッガーの現象学的存在論が重要な制限否不当なる抽象を免れて居ないことを認めるに躊躇するものではない。その根底に置かれた存在が、道具としての物に交渉し、死の覚悟に於て自主性を獲得する個人的存在であることは、この存在論をしてその志向に反し、真に歴史的なる社会的存在を解釈する途を失はしむるもの、道具としての交渉に於てでなく、同じ生命の融通する統一としての宗教的に体験せらるべき世界との交渉を欠く為めに、個人の有限存在が原子論的に宙に浮ぶことは、この創意豊なる存在論の根本的な欠点であると思ふものである。

『西田先生の教を仰ぐ』 田辺四・三三二

これは西田のフッサール・ハイデッガー解釈に対して異を唱へる文脈の中の発言ではあるが、ハイデッガーへの批判として「道具としての交渉」のみでは「個人の有限存在が原子論的に宙に浮ぶ」こと

になつてしまふと言つ。

「人間学の立場」 田辺四・三七二

さらに『ヘーゲル哲学と弁証法』の序文において参照指示が為されてゐる論文「人間学の立場」では、より具体的に次のような批判が述べられる。

然るにそれにも拘はず氏（ハイデガー）は少しも身体性の問題に触れることなく、其解釈学的方法も「生の哲学」が身体的表現からその了解を始め、常に具体的なる生の外化に結合くと異なり、生から遊離せられた単語の解釈を主要な手懸りとするのは、全く身体性を閑却するものといはなければならぬ。其結果前述の如く個体としての我の超越的全体に於ける限定が了解すべからざるものとなる。氏の自覚存在論に於ては、物は凡て具体的本来的には器具として解釈せられるのであるが、身体は一方に器具の典型的なるものであり、凡ての器具は身体の延長として解せられるものであると同時に、他方に於ては身体は如何にするも器具として我に所属すると解する能はざる他面をもつ。即ち、我を超えて存在する超越的全体の限定の媒介たる意味がこれである。個我としての我が全体に対立して而も其内に独立自存するのは身体の限定に依る。

田辺は、ハイデガーの思想は「身体」を閑却するものであり、その結果全ての物を「器具Zeug」として捉えることになつてゐるといふ。というのも、「身体」は一方で「器具」の典型型でありながら、他方でもどうしても「器具」とは解せない面をもつためである。「超越的全体」ということに関しては、合わせて次のような発言も押さえておきたい。

家族、部族、民族を経て人類社会に至るまで、利益社会ならぬ共同社会は如何にするも我に対する実用性所属性に解消する能はざる、我の存在の母胎たり地盤たる超越的存在者である。

「人間学の立場」、田辺四・三六三〜三六四

ここでは、家族から人類社会に至るまでの「共同社会」が、「我の存在の母胎たり地盤たる超越的存在者」として捉えられている。従つて、「人間学の立場」における如上のハイデガー批判は「西田先生の教を仰ぐ」と同一線上にあるものと見てよいだろう。全てを「道具」として見る立場からは「個人」しか考えられないのに対して、「身体」を考慮に入れば「個人」と「社会」との関係を明ら

かにすることが出来る。このような対立を田辺は描く。

田辺のハイデガー批判における「道具」と「身体」について簡潔に確認した。もちろん、それは田辺のハイデガー批判のごく一部を垣間見たに過ぎないし、「人間学の立場」の内容についても説明を尽くしたとは言うことが出来ない。しかしながら、田辺と中井との相違を考えようとする観点からすれば、以上の概観はすでに重要な示唆を含んでいるように思われる。

というのも、こうしたことを踏まえるならば、中井が書評において「身体性の問題」をハイデガーとの繋がりを示唆する「道具の付託性」という言葉を用いつつ⁴⁾、「機械の問題」へと発展するものであると述べていたことについても疑問が生じて来るからである。中井は田辺がハイデガーの「道具」についての考えを批判しているにもかかわらず、両者をつなぎ付けるような解釈を「ノイエ・ザツハリツヒカイト」において示している。その背景には中井自身の「道具」についての理解が存しているのではないだろうか。そのように推測するならば、本稿は続いて中井の思想へと目を向けなければならない。

三 中井における「身体」と「機械」

序でも言及したように、中井は既に一九三〇年に「機械美の構造」という論文を発表していた。当時まだ三十歳になったばかりの若手の研究者であったとはいえ、田辺が一九三二年の『ヘーゲル哲学と弁証法』を刊行するまでの数年間、あるいは先行しあるいは並行しつつ、自らの「道具」や「機械」を巡る思索を進めていた⁵⁾。

中井は一九三二年に「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」を書くまでに、「機械美の構造」をはじめとっていくつかの論文で、「道具」や「機械」について論じている。しかしながら、ここでそれらを一一つ比較しながら検討することは出来ない。「ノイエ・ザツハリツヒの美学」の内容を理解する上で必要となる点に絞って簡単に見て行きたい。

先に田辺との関係を示すものとして引用したのは、「ノイエ・ザツハリツヒカイトの美学」の「4」の内の一部である。それに先立つ「2」や「3」で中井は、専らカッシーラーやハイデガーについて論じている。そして、特にカッシーラーの重視は中井の思想の特徴とも言いうると思われる。

「機械美の構造」を発表してからさほど時間が経たない内に、中井は一九三〇年一月の『哲学研究』に「機能概念の美学への寄与」という論文を発表している⁶⁾。そして、そこにおいて自身の思想の中にカッシーラーの「実体概念 Substanzbegriff」と「機能概念

「Funktionsbegriff」のとの区別を大胆に導入しつつ、従来から論じていた「機械美」の問題を發展させる。「私はここに、またカッシーラーでは問題にされざる技術の問題が、彼の意味する機能概念の深い發展であると考えたいと思う。「機能概念の美学への寄与」、中井一・一七六」という発言がその事情を端的に示している。

そこに至るまでの行論を事細かに見ることは出来ないので、中井がこの発言の直前に挙げている比喩を取り上げることにした。

例えばここに、軍艦の概念を検討するとする。記憶心象による軍艦は時々刻々に変化している。明治時代に軍艦と呼んだものを頭に浮かべるものにとって、現今の軍艦は一つの怪物にしかすぎないであろう。ここにいわゆる記憶を地盤とする表象をもって論ずるとするならば、そこには何の一般をも導くことはできぬであろう。ここに技術科学における論理において、心理主義的表象がいか力弱きかを露わにしている。そこで、技術家は軍艦の概念をいかに取り扱うか。いわば彼らにとつて軍艦とは、水上における攻撃、防御、運搬、居住などの要素の複合的構成である。

「機能概念の美学への寄与」、中井一・一七四～一七五」

ここでは軍艦を例として「実体概念」と「機能概念」の対比が描かれている。「実体概念」はこれまで見て来たものの「記憶心象」を抽象して得られるものであるが、その立場からは明治時代の軍艦と昭和の軍艦のように全く在り方の変わってしまったものを同一の概念として捉えることが出来ない。それに対して「機能概念」では軍艦の概念は「攻撃、防御、運搬、居住」といった諸機能の複合である。その為、従来とは全く異なったものでも同じ概念において捉えることが出来る。すなわち、技術の發展そして機械の誕生などを取り扱う為には、「機能概念」を用いる必要があるというのが中井の主張である。

こうした思想は人間にも適用される。そして、そこにおいては「身体」と「道具」との関係や「個人」と「集団」との関係が述べられることになる。田辺と中井との相違を考える上で、次のような記述は極めて重要であると思われる。

身体をもって、一つの生物的構成と考えるならば、それはあらゆる機能の複合体である。その機能を補足し、倍加する構成体がすなわち道具および機械の概念である。打撃の機能をもつ拳が、石を用い、鉄槌を用い、ついに巨大なる蒸気鉄槌となるにいたる過程はすなわちこの機能の發展の意味におい

て身体の拡大射影であり、巨大なるロボットの出現である。飛行機と人の跳躍、艦船と遊泳、レンズと眼球、ラジオと鼓膜ならびに声帯等々の構成は、自然構成より道具、道具より機械への機能拡大への過程である。そしてすでに後者の領域ではその表現および感受のすべてが、個人意識の領域を超えて、集団構成の社会性の上に成立する。そこに身体構成は、分かれがたき溶融をもって社会的集団構成の中に浸潤していく。そしてこれまで個性との名をもって基準とせし個体が、今は性格の名をもって基準とする集団性が巨大なるその外貌をあらわすにいたる。表現にも観察にも、芸術は大きな変革をここにこうむったわけである。レンズの見いだす新しき美、機械の見いだす新しき美、いわゆる現今の技術美とは、この性格的美の上に構成さるるといえよう。

「機能概念の美学への寄与」、中井一・一九四〇—一九五頁」

人間の身体を「機能の複合体」として捉え、「道具」や「機械」をその機能を拡大するものであるとしている。技術の発展に伴ってすでに人間は「巨大なるロボット」になっている。そして、レンズやラジオといった新たな「道具」の登場によって全ての表現や感受が「個人意識」を超えて「集団構成」の上に成立し、「身体」は「社

会的集団構成」の中に溶けるといふ。このような観点から中井は新たな「技術美」を根拠づける。

このような中井の主張は、一見すると「身体」と「道具」との連続性を指摘する点において田辺と一致するようにも思える。実際にそのことが書評における中井の田辺への極めて高い評価にも繋がったのだろう。しかしながら、既に見て来たように両者の思想の内に実を鑑みるならば、その間には埋めがたい差異が存していると言わざるを得ない。

田辺はハイデガールの「道具」についての考えを批判し、それだけでは「個人」が宙に浮かぶことになり、「身体」を視野に入れることで「社会」を問題とする必要があると述べていた。それに対して、中井は「身体」が「道具」「機械」を通して発展することによって「個人」を超えた新たな「社会的集団構成」が誕生すると述べる。中井は田辺が「人間学の立場」や『ヘーゲル哲学と弁証法』を著す以前から持っていたこのような思想に基づいて田辺を理解し、書評や「ノイエ・ザッハリツヒカイトの美学」を書いた。その結果全面的に肯定するかのような評価を与えていながら、その実異なった主張をしているという事態が生じたと言ってよいだろう。

そして、中井が「機能概念の美学への寄与」で主張していた「身体」と「道具」「機械」との関係は、その後も維持される。次に引

用するのは、約二十年の時を経た一九五一年に書かれた『美学入門』の一節である。

かつてわが国でも、情報局は、文部省その他の機構を結集して、一つの認識の主体を構成しようとした。各国の情報網もあらゆる図書館網を通じて、研究の機関を通じて、一つの認識主体をつくりあげようと努力した。そこでは、国家の全機構が一つの認識の主体であった。ラジオはその耳であり、写真は一センチ平方の中に数頁の本を写す技術まで獲得していた。電信、電話の全組織、映画、新聞ももちろんその全機構を最も動く機能としているのである。それらの集団的機構を動かすにあたって、そのあたかも個人の思惟機構にあたるものは、すなわち各種の委員会なのである。集団組織が物を考えるすがたが委員会なのである。ここではもはや一人の個人の影はその障碍でしかなく、その組みあわせの精密さと明るさのみが、明哲にして精微な巨大な思惟の標準となるのである。

『美学入門』中井二・二二八

一つ一つの表現においては様々な差異があり、また「委員会の

論理」を経たことで「委員会」という言葉が用いられるようになっていくことも目に留まる。しかしながら、全体の趣旨としては「機能概念の美学への寄与」と軌を一にしている。「機能概念の美学への寄与」を書いた後に田辺の著作に接してからも、この点に関する中井の思想は大きな変化を蒙ることがなかった。

四 「天才」を巡って

以上において、中井と田辺との間の「道具」についての理解の差異が、中井の田辺に対する理解にずれを生み出していることを見えて来た。その事情については前節までで一定の説明を与えることが出来たと思われる。本節では、それに加えて両者の思想の間の差異をもう一点指摘しておきたい。その差異は「個人」を巡るものである。

中井は「機械美の構造」以来、しばしば次のような主張をしている。

この新しき芸術観すなわち天才と創造と美の概念は、それが指摘され確立されたる時は実に正当なる権利を保持したるにもかかわらず、その解釈者あるいは亜流によってみずからその正当なる意味の理解を失すること、あたかも技術と模倣の

概念がその正当なる意味の理解が怠られたるとどうようであったことである。すなわちそれはかの天才と独創と美の概念がついにややもすれば放恣と個人性と非真实性とに仮託の重要さを貸し与えるにいたった危険性である。そして現今の芸術がになえる悪評はまさしくその欠陥においてであるといえよう、将来の美学をになわんとして努力する人たちのおおむね注意する点もまたこの欠陥においてである。そして彼らの視線は再び天才より技術へ、独創よりも模倣へ、唯美よりも社会的普遍の実在へ結ばるるにいたったのである。

「機械美の構造」 中井三・二四〇～二四二

引用からは省略したが、この直前では深田康算の名前が出されている⁸⁾。中井は師の説を引き受けつつ、芸術の歴史において古代は「模倣」と「技術」の時代であったのに対して、近代では「天才」と「独創」と「美」からなる芸術観が新たに興ったが、それも今や「放恣」と「個人性」と「非真实性」に墮していると述べる。そして、それを再び刷新するのが「機械美」であるというのが、この論文の骨子である。

ここで注目したいのは、中井が「天才」の「独創」を否定的に捉えていることである。前節において見た『美学入門』の一節におい

ても、個人は集団組織に対して「その障碍でしかない」と述べられていた。この点は中井の大きな特徴の一つであると考えられる。当時の社会においては既に「天才」が集団の中に解消されているということを巡る中井のより詳細な発言としては、次のようなものが挙げられる。

演劇および映画のきわめて明白な株式会社制度は天才をスタートとよび監督とよび共に会社の Ingenieur である。レンズを眼とし、委員会を決意とし、企画をその夢想とし、統計をその反省とするところの一つの利潤的集団的機関である。そこでは指令と統制と経済状態がその健康度の機能となるのである。われわれはその構成のどこかの底に自由なる天才の姿を求めべきであろう。そではウーファあるは、パラマウント、日活あるいは松竹等々の芸術的性情を見いだすのであって、監督の個性よりも、レンズとフィルムの類型のほうが、より大いなる性格差をそこにもたらすのである。すなわちかくして、この個人主義的芸術はみずから利潤機構の弁証法的転回の線にそって、すでに集团的構成の中に転成しているのを見るのである。

「思想的危機における芸術ならびにその動向」

株式会社が制作する演劇や映画において、「天才」は「スター」や「監督」として組織に組み込まれる。そこには「自由な天才」の姿などどこにもないという。そして、映画作品の性格の相違は機材の違いや「日活」「松竹」といった制作会社の違いに起因することになる。このような文章を見るならば、「個人」「天才」が集団の中に解消されるという事態を極めて具体的に理解することが出来る。

こうした中井の考えが、あくまで個人と社会との対立関係をも視野に入れて考えようとする田辺と異なつたものであるということとは容易に予想できるだろう。そして、実際に美学における「天才」に関して中井とは真つ向から対立する発言を残している。

田辺が美学について扱つたものは少ないが、一九五一年に『ヴァレリーの芸術哲学』という著作を残している。本稿が主として扱っている一九三〇年頃とは時期的に大きく隔たつており、その間に田辺の思想に様々な変化があつたことを無視する訳にはいかないが、この点に関しては中井の文章と引き比べて見る価値があると思う。田辺はこの著作の中で、ヴァレリーの『詩学序説』に対して次のような発言をしている。

特に私にとつて一段と力強い感を與へるのは、その説く社会と個人との対立的統一、その各々の否定転換の媒介関係が、従来私自身、社会の歴史的行為的自覚を意図して考へた種個媒介の弁証法、私のいはゆる「種の論理」に、全く符合することである。実に私は、始めてこの書を読んだとき、一読三嘆、大なる悦を禁ずることができなかつたのである。

『ヴァレリーの芸術哲学』田辺十三・一一七

田辺はヴァレリーの『詩学序説』について「一読三嘆、大なる悦を禁ずることができなかつた」とまで述べている。その理由は、ここに社会と個人との関係が示されており、かつ「種の論理」とも一致するものであつたからであるという。

そして、ヴァレリーの説における個人と社会との関係を説明する記述の中に「天才」という言葉の出でくる次のような箇所がある。

そもそも芸術作品の生産者である芸術家が、大小の相違はあれ、いづれもいはゆる天才として、夫々個人の自由なる行為の主体たることには、何人も疑を挟むことはないであらう。

社会学的範疇を用ゐれば、それは個といふべきものなること明瞭である。ところで経済の場合には、生産者もいはゆる生

産階級を形造り、むしろこの方が生産大衆として社会的集団を結成するといはなければならぬ。しかしこれは経済的生産の、芸術的作品生産と異なる特色に外ならないのであって、前者の物質的生産にたづさはる勤労大衆が、集団労働の水平化により個性を没却せられた量的多数として規定せられ、その結果階級闘争に於て、その統一的勢力を発揮する団結をなすことに由来するのである。それは芸術的作品の生産に於ける個人の天才が、その生産行為の主体たるとはまさに正反対でなければならぬ。

『ヴァレリーの芸術哲学』 田辺十三・一二一〜一二二

ここでは芸術家は、「個人の自由なる行為の主体」としての「天才」であることは疑う余地がないと明確に述べられている。それは「経済的生産」の場合には「勤労大衆」が「個性を没却された量的多数」となるのとは正反対である。もとより、『ヴァレリーの芸術哲学』は全面的にヴァレリーを称揚するだけのものではなく、田辺の立場からの批判をも含むものであるが、この点に関しては田辺自身の考えでもあると見てよい。

「人間学の立場」においても、田辺はあくまで個人と社会との対立を含んだ関係を問題としていた。そして、そのことは『ヴァレリ

イの芸術哲学』において美学が話題となったとき、自由な個人としての「天才」が疑い得ないものとして登場することに繋がっているだろう。そうである以上、この点に関しても田辺と中井との間委には大きな距離が隔たつていと言わなければならない。

結

本稿では、田辺と中井とが互いに肯定的に言及し合っている文章から出発し、両者の著作を比較してきた。中井は田辺の哲学を自らの思索の前提を成すものとして高く評価しながらも、その田辺に対する理解は自らの思想に引き寄せたものであった。また、田辺は中井の「機械美」に言及していたという記録が残っているものの、後にはヴァレリーの美学に「一読三嘆」し、中井の思想を受け入れることはなかった。「身体」と「道具」、「個人」と「社会」といった主題、またハイデガー哲学をどう見るかということなどの共通する問題を扱いながらも二人の思想は大きく異なるものであった。

本稿における両者の比較はごく表面的なものに止まっていると言わざるを得ないだろう。様々な著作に言及しながらも、それぞれの内実について十分に深く考察することは出来なかった。両者の思想に対するより精緻な解釈を踏まえることによって、更なる考察を

行う余地は残されているものと思われる。しかしながら、ごく簡単な比較を行っただけでも、両者の間に一定の差異が存していることが示せたとするならば、そのことに満足してここに稿を閉じたい。

(かわい かずき 筑波大学大学院)

※中井と田辺からの引用については、それぞれ『中井正一全集』全四巻、美術出版社、一九六四〜一九八一年及び『田辺元全集』全一五巻、筑摩書房、一九六三〜一九六四年を用い、引用に際しては文献名の後に「著者名巻数・頁数」の形で表記した。

注

- (1) 中井は戦後に自らが『哲学研究』の編纂に携わっていた時期のことを書いた文章の中で、「田辺博士の土曜日の訪問日は、きらびやかなゼミナールにも等しかった。」「回顧十年——思いいずるままに」、中井一・三〇五頁」と振り返っている。

(2) 後藤嘉宏『中井正一のメディア論』学文社、二〇〇五年は、第三編第三章において中井の田辺に関する記述を整理しているが、両者の著作の内容の比較には踏み込んでいない。また、中井の後輩にあたる久野収は

同時代人の立場から次のように、中井と田辺及び他の京都学派の人物との関係を述べているが、具体的な考察はない。

彼の主体性の哲学は、そこで当然、理論的主観性を否定的にいかした実践的主観性の哲学にならないわけにはいかない。三木清、戸坂潤につづいて、京都哲学左派の大先輩であった彼は、ここで当時の西田哲学の制作的主体性と場所の論理や、田辺哲学の道徳的主体性と世界図式の論理や、和辻哲学の人倫的間主体性と問柄の論理や、のちの京都学派の根元的主体性と日本中心の世界史の論理に出あい、血のにじむような格闘をくりかえすのである。読みとる眼力をもっている読者諸君なら、これらの哲学と一つ一つ争点をとりあい、追いつき、追いついていく彼の姿と努力をぶりに、目をみはる思いがするであろう。

「久野収『二〇年代の思想家たち』岩波書店、一九七五年、一六八頁」

- (3) 田辺とハイデガーとの関係について詳しく論じたものとしては、嶺秀樹『ハイデッカーと日本の哲学―和辻哲郎、九鬼周造、田辺元』ミネルヴァ書房、二〇〇二年や合田正人『田辺元とハイデガー―封印された哲学』PHP研究所、二〇一三年などがある。

(4) 中井が「道具の付託性」という言葉を用いる際にハイデガーを念頭においていたことは次のような記述からも明らかである。

(8) 中井が自ら言及している通り、この箇所は深田康算「模倣としての芸術」
『深田康算全集 第一巻』玉川大学出版部、一九七三年所収を前提とするものである。

ハイデガーが空間性の概念を道具のもつ付託性の構造の中に見出し、その存在性格を範疇の意味と実存論的意味に分類したところの仕方は、今私達の解釈に対してよき出発点を描いて呉れる。

『スポーツ気分の構造』中井一・三九六〜三九七

(5) 中井の機械や技術に関する思想を論じた近年の研究として、刈部直「技術・美・政治―三木清と中井正一」（起点としての戦後―政治思想史と現代）、千倉書房、二〇二〇年所収）がある。

(6) なお中井は全く問題の異なった論文を一九三〇年九月号の『美・批評』に発表している。両者の詳細な比較に本稿では立ち入ることが出来ないが、全体として類似した趣旨ながら『哲学研究』版の方が分量的にも多く充実した内容になっていることから、『美・批評』版を準備稿と見て大過ないと思う。

(7) カッシーラーの Funktionsbegriff は今日では通常「関数概念」と訳されるが、中井はほとんどの箇所で「機能概念」と訳している。その背景には中井のカッシーラー理解があるものと思われるが、本稿では立ち入らない。